
奴隸王女の「死ねばいいのに」は結構辛い。

廻

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奴隸王女の「死ねばいいのに」は結構辛い。

【Zコード】

Z8329Y

【作者名】

廻

【あらすじ】

ん？　え？　わたし？　名前は、言えないなあ。ほら、バレちゃつたら殺されちゃうし。まあ、二つ言つとするなら、わたしは元女王で　　今は、奴隸やってます。そんな、わたしこと、せーちゃん（　）がお送りする、奴隸が主人公のお話し。恋愛？　ここに恋愛要素を感じられたら、あなたは立派な変態だよ。

元王女。今は奴隸。

奴隸。まあ、わたしは、そんな御身分。

とある極悪商会の不正を暴くために潜り込んでいる、王国の秘密組織の諜報員の一人、とかではなく、掛け値なしの、奴隸女。

見た目は、自分で言うのもなんだけど、結構可愛いと思う。

肩で切り揃えられた髪の毛は、まあ汚れとかで臭いけど、洗えば鶴の濡れ羽のようだと、昔のご主人様に言われた気がするし、肌も、いろいろ傷がついて膿んだりしているから汚いけど、昔は真っ白だつた。

そんなわたしは、今は昔、とある王国の王女様だった。

だけども、なんだか、革命が起っちゃったみたいで、わたし逃亡中。

その途中に、この奴隸商のクソ豚に捕まえられて、鉄の手錠なんかはめられて、首には呪い付きの首輪なんかはめられちゃって、犬みたい。

いつのまにか、眉間に皺が寄っていて。

とあるご主人様に声をかけられて振り向いたとき、「なんだその顔はっ!」と殴られてしまつた。余計に不細工になつてしまつて、また同じ商会に売り捨てられたけど。

手首も首も、膿だらけ。血がこびり付いて、ヤな臭い。

けど、これはまだマシな方なのだそうだ。クソ豚が言うには、だけど。

昔、肩口が膿んでいた女性がいて、クソ豚がほつたらかして各地を転々としていると、運悪く、虫が群生しているところに行つてしまつた。

まい　じにからは言わなくともいこと思つたゞ、うん、虫が沸いたらしい。

うねうねと、幼虫が出たり入ったり。

泣き叫ぶ女がうるさいから、そのまま殺してしまつたらしいけど惜しいことをした、なんて言つていた。

そのときは、殺してやろうかと思つたけど。

それは、首と手についている呪いの枷が、許さない。

これをかけた所有者の意にそぐわぬことすれば、激痛が奔る仕組み。

昔、強く反発した女性が発端で、これをつけるのが始まつたらしけど、いい迷惑だ。本当に。

まあ、それでも強く反発する女性がいたらしいが　痛みにのたうちまわり、あつけなく泡を吹いて、田を白黒させて、絶命したそうだ。

それからというのも、クソ豚に逆らうのは暗黙の了解として禁止とこうことに、じの商会の女性の間ではなつてゐらしい。

そこまでして生きたいのか？　と言われれば、そんものは愚問だと、答えるしかない。

生きたくない人間なんてのも、じにはいない。
少しでもいいから。

死にたい人間なんてのも、じにはない。

ときどき、泣きながら、「死にたい死にたい」と蹲つている女性を見るけど、やっぱりその娘も自分で命を断つとはしない。死にたいのなら、クソ豚に反抗すればいいだけなのに、それをしないのは、やっぱり死にたくないからだ。

元王女のわたしが言つるのはなんだけど、本当に、クソッタレな世

の中だと思つ。

こんな世の中にでも、人の不幸せを狙い澄ましたかのように陥れ、嘲笑つている人間がいて、そのせいで泣き叫んでいる人もいる。

わたしも、そうだつたから。

奴隸の剣闘士の戦いなんかを見て、はしゃいでた。

それが、今となつては その側なんだけど

こんな世界にも、なんだか最近、希望と呼ばれるものが出来たらしく、勇者の一団が、王国から魔王をやつつけに出立したらしい。

『勇 者』ウルナ・イーケット。

『連立世界』エル・ウェグナー。

『創造輪廻』ルシル・ヘルファーーデ。

『天 災』ショーナ・アクザリオン。

フザケタことに、勇者以外は全員美女らしい。それも、絶世の死ねばいいのに。

それ以上にフザケタことと言えば、勇者たちの目的、魔王の打倒だろうかね？

そんなことをして、どうしようつといつのか。

魔王がいるのは、魔帝国と呼ばれるところ、魔族と呼ばれる種族が暮らしているらしい。その姿はほとんど人間と一緒にで、だけど、瞳は絶対にオッドアイなのだそう。

なんだか、その国は他の国とは仲が悪いらしい なんて軽い言葉で片付けるのはいけないのかもしれないけど、簡単に言えばそんなモノなんだろう。

王国側の意見は、こうだ。

『我々の雌伏の時は、今終わった。魔族に虐げられてきた歴史を、今、今こそ！ 塗り替えるのである。聖人君子の如き勇者と、その

仲間たちが、必ずや！　その夢をかなえてくれるであらうことを、私は信じているツー！』

だそうだ。

死ねばいいのに。

虐げられたから虐げるとか、低次元にもほどがある。低次元というかなんというか、次元に存在して欲しくない。いつそのこと死んでしまえ。

死ねばいいのに。

そんな思想を持つ奴ら、全員、死ねばいいのに。
魔帝国の人たちにも、絶対、なにかしらがある。
なかつたとしても、そんなことはどうでもいいんだけど。
だつて、王国だつて、あるのかないのか分からぬような理由で、
魔帝国の人たちを、根絶やしにしようとしているんだから。

まあ、わたしには、何の関係も無いお話なのだけれど。

嬉しいことといえば、まあ、今日のスープはクソ豚が奮発したみたいで、美味しかったということぐらいかな？

それに、最近危機感を覚え始めているのは、奴隸仲間の女の子たちが、若干百合に目覚め始めていること。時々、寝ているそばで、可愛らしい花の声が聞こえる。

わたしも、昨日誘われた。「やうないか？」だつて。
やらねえよ、ばか。

そんなある日のこと、わたしはいつもどおり際どい服を着て、薄暗いホールでくねくね蠢いて観客　わたしの将来のご主人様たちを誘惑していた。

なるたけ、優しそうな人に。なるたけ、なるたけ、だけど。
わたしの夢は、もう、絶対に咲かないことは、分かつているから。高望みはしないように、している。

小説では、こうこうとも、勇者がドアをぶち破つて、「なんてことか」と、「とか嘆くらしきけど、そんなことは望んでもいいない。

で、大体は、一人の女の子が昔、自分に何かしらの関係があつた女の子に似たりしていて、女の子も優しくされて一目惚れだとか腐ればいいのに。

そんな幻想、殺されてしまえ。

そんなわたしは、今日もせつせとくねくね動いて、未来の「主人様たちを誘惑。

していようと

「ばがん！」とドアを蹴破って、金髪碧眼の優男がどなり声を上げながら入つて来た。

それから、護衛の人たちが戦ったけど、金髪碧眼の優男は光とか出してめっちゃ無双してた。ズバア、とか、ブツシャア！　とか。

いや、待てよ？ このパターン、嫌な予感がする。

「あなたたちのために戦つてます」的な雰囲気とか
ちょ、「あなたたちのために戦つてます」的な雰囲気とか

もいいから、説教とか口鞭叩かなくていいから！

三十分後。

なんだか強そうな大男を、「だけど俺は負けない」的なことをほざいて、きらきら輝きながら倒した金髪碧眼の優男は、呆然と立ち尽くすわたしの方に歩いてくる。

何を思つてゐるのか、わたしを見て、「き、きみは！」とかなんとか言いだして、はつとなつてぱつとなつて、フツと達觀したよう

な顔になつたかと思つて、いつの間にだつた。

「一緒に、来るかい？」

わたしは、言葉が出なかつた。
うれしい？ 感動？

あー、はいはい。いいお話だね、うん、最高だよ。小説だつたら、
の話だけど。

今ね、きみ、分かつてるかな？ うんうん、分からないよね、温
室育ちの勇者くんには。わたしもその分からない気持ちは分かるよ
？ 温室出身だし。

だからね？ 教えてあげるよ。

「死ねばいいのに！――」

勇者について行つたら、命がいくつあっても足りるかボケエ――！

元奴隸。今は被害者。

結果。結果？ 本当、どうしてくれるんだよコウシヤサマ。
わたし、職を失ったじゃないで「ゼーせんか。

いや、ね？ 考えても見てくださいよ。奴隸って言つてもね？
無理矢理連れて来られて無理矢理奴隸にさせられた人と、無理矢理
連れて来られたけど最終的に納得している人と、お金が無くて最終
的に自分を売った人と、極悪罪人が奴隸にされているケースとか
あるんですよ？

そしてね？ 奴隸つて言うのは、もうこの世界に根強く根付いて
いるんだから、こんなことをしても無意味。というよりも、世界に
とつては大きな損失とも言えるんだ。

で、わたしが最終的に言いたいことは、

「あなた、馬鹿ですか？」

この一言なわけ。

おわかり？ 自分がしたこと、わかってる？

世界中の奴隸を解放したとして、その後何が待ってるっていうん
だ？ その全員の面倒を見てくれるとでも？

戯言だね。そんなの、温室育ちの勇者くんにはわからないだろう
けど、そんなことはムリ。

奴隸商人だつて、きちんと秩序ぐらいはある。

無理矢理人をさらうケースなんて極稀。大抵は、人身売買。

だから、その後に待つてるのは、また奴隸。

勇者くん。あなたがしたことは、そんなことなんだよ。

「馬鹿じやがないさ。俺だつて、結構考えて助けたんだ」

「その考えとやらを聞かせてください」

そう尋ねるわたし。

「元居た場所に返してあげのさ」

元居た場所なんてない人はどうすんだよバカ勇者。バカ王子。アホの子。

死ねばいいのに。

考えなしの男なんて、すべからく地獄に落ちてしまえ。

なんてことは言えるはずも無く、わたしは、いつにない怒りを押さえながら、ヤサシーケ、テーネーに教えてあげることにした。
わたしつて、偉い。

「いいですか、勇者さま。元居た場所が無い人は、どうするおつもりですか？ もしくは、いた場所を追われた人や、自分から奴隸になつた人」

「む？ 元居た場所が無い人などいるのか？ それに、追われた人にはその場所の人と和解してもらえばいいし、自分から奴隸になつた人はまた人生の再スタートと思つて、やり直せばいいだけではないか？」

出来ないから、奴隸になつたんだろうが。

物凄く頑張れば出来ていたはず、なんてのは幸せ者の発想なんだから。

奴隸になる直前だつて、物凄く頑張ったはずなんだから。死に物狂いだつたはずなんだから。

最初に出来なかつたことは、最後まで出来ないんだよ。

ファンタジーの小説じやあるまいし。ちょっと手を抜いていて、あとから本氣を出したら楽勝でした、なんてことは絶対ない。

「どうでもいいんですけど、わたしは、あなたにはついて行きませんから」

大事なこと。勇者なんかについていたら命がいくつあつても足りない。

伝説の剣なんて抜けるはずなんて、そんなこと、絶対にない。

「なんで。俺についてくれば、君が心配しているようなことにはならぬはずだよ」

なるんだよ、あほ。

だから第一王子はアホの子つて囁かれるんだよ、あほ。

「しつこい男は嫌われますよ、勇者さま。わたしなんかより、ほら、あなたの後ろでわたしのこと物凄く睨んでる人たちとか、めつを美人じゃないですか」

「なんですの、あなた。今さつきから、ウェルナ様になれなれしく、しつれいですわ」

そう言つてくるのは、金髪碧眼の美女。物凄い美女。

それ以外は特徴なし。特筆すべき点は、美人。ただそれだけ。

「ふつ、没個性。消えていなくなればいいのに。」

「エル、言い過ぎだ。我が主が気にかけているのだから」

そう言つのは紫髪紫瞳の美女。物凄い美女。

なんだか、人間じやないっぽい。怖い。がくぶる。

「ルシル、これ以上女の子が増えたら、ご主人様の体もたないよー。
まさに精を絞りとられるつていうかさー」

そう言つのは、橙髪橙眼の美少女。

元氣つ娘。抱きつきたい。もふもふしたい。わふわふ。

「落ち着いてよ、三人とも。俺は、この人と話をしてるんだから」

「　「　「はー（ああ）（はーこ）」「」

死ねばいいのに。

逃げ出した。

一日ゆっくり考えててくれ、と言われて、まあ、逃げだした。

みんな女たちと一緒にいるのは嫌だし、あの勇者と一緒にいるの

（・・・）

も嫌だし、つてこりか、あのハーレム要員になるとか、考えただけでも吐き気がする。

なんだって、わたしの生活を奪つたアホの子のために腰振りなきやならんのだ。

わたしの婿さんは、農家の優しいお兄さんつて相場が決まつてゐる。おわかりかな、坊や。

「……逃げてきたのはこにナビ、リリ、ビリビリだわ！」

無計画過ぎたかな。

こんな、こんな襤襪衣のような恰好じやビに泊めてもうれないだろ？！、物乞いをするにも、なんだかなあつて感じだし。

それに、早くこの街からでないと追手が絶対に来る。

あの手の男は、わたしの過去に辛いことがあってなんやら？！やらとか、余計な御世話を焼きたがるんだ。

まあなんにしても、お腹が減つた。

誰か飯くれ。

「ひーれほーろひー」

あ、馬鹿だ。馬鹿がいる。

なんだか、冒険者っぽい格好をした、酔っ払いの青年がいる。

…………あの男の、ヒモになる！

思い立つたが吉日。わたしは出来るだけ楚々とした雰囲気を出して、青年の下に近づく。

「あ、あの」

「んあ、ジーしたのですか？　いやあ、僕、仲間に馬鹿みたいに飲まされてしまつて、こんなじょーきょーになつていのあります、上官殿オオ！」

「きやあー？」

「せなじ抱きつこへきやがつた。

なんかわたし、上官殿になつてゐる。泥酔か。泥酔泥酔。

「うーん、おねえさん、いい匂いがしますね～。くんくん」

変態だ、と思つたけど、待てよ？　それはないはずだけど。もひ、一週間は体を拭いてないはずだし。クソ豚の血とか最後に浴びたままで、自分でも吐き気を催すほど臭いし。

「そんなことあつませんよ」

「いえいえ。優しい人間の臭いがしますよ～。くんくん」

「うひ。どこ嗅いでる。

じゃなくて。そんなお色氣はわたしに求めるでない。みたいのなら娼館にでも行ってくれ。

「あの、わたし、住む場所が無くつて」

「うん、やうなのでですか？　あはは、それならもうと、早く言つてくれればいいものを。僕の家でいいのなら、泊つてもかまいませんよ」

「え、あつがとうござります！」

やばい、わたし、猫かぶりがつま過ぎる。

まあ、そのまま監禁とかされるかもしれないけど、それはそれで、動かなくていいから楽そうだし。

「あの、お名前を聞いても？」

「ん、ああ、僕の名前ですか？　ええ、僕の名前は――」

「探せ、探せ！　まだこの近くにいるはずだ！　魔王が、この街に現れた！」

え？

「アルベル・フォン・レグナント。魔帝国の領主ですよ！」

ええ？

「まあ、なんですか。騒がしくなつてきたようですし、ちょっと場所を変えましょう」

指パツチン。

地面に魔法陣が浮かび上がつてつて

え？

視界が暗転して断線したかと思うと、すぐさま風景は細やかな線に変わって、そのなかでたゆたつていると、わたしの身体は、見知らぬ、お城のような場所に出ていた。

「よひよひ。おねえさん」

そう言つて、地面に大の字になつて倒れていたわたしを見下ろす、

冒險者風の青年。

瞳は、金と銀の、オッドアイ。

ああ、魔族じやん。

「僕のお城に、ようこそ」

うん。

なんだか、魔王に拉致られた。

元奴隸。今は被害者。（後書き）

手抜き感溢れるツー

ご感想、批判等々、お願いします。

元被害者。今は自由人。

わたしは、なんだか魔王さんに来ちゃつたみたいで、物凄く莊
厳というかなんというか、まさか人類の敵の本拠地にいきなりワー
プするとか、わたしも大概だな、とか。
色々思つたけど、なんていうか、魔王さんがめつさ氣さくな人だ
つたつていう新事実。

「せーちゃん、困つたことは無いですか？」

「あ、大丈夫ですはい。ものすごく居心地がいいです」

「そう。それはよかつたです」

そう言つて二ヶコリ笑つて、わたしにあてがつてくれた部屋に入
つてくる魔王さん。

格好は、わたしと会つた時のオサレな冒険者風の服ではなくつて、
ホントの王様みたいな、黒系の服。

わたしの服も、最初はなんだかやばいぐらい「ゴージャスな服にな
りそうだつたけど、わたしが嫌がつているのを見て、自然と変えて
くれた。

魔王さん、やばい。

笑えるぐらいいい人。

人間なんて、死ねばいいのに。

おつと、自分まで死ぬところだつた。

「魔王さん、政務とかは良いんですかい？」

「うーん。どっちかっていいますと、最近人間の侵攻が過激になつてきているから良くて無いんですけど、僕の部下は有能な人が多いので」

なんだか儂げに微笑む魔王さん。

わたしのイメージとしては、大口開いてがつはつぱーとか笑つてそんなイメージだったんだけど、気のせいかな。

おじいちゃんに聞いた話でも、なんだかそんなこと言つてたし。

曰く、『両の手に人間を捕まえ、その巨大な口で噛み千切る』とか。

ばかめ、この魔王さんがどうしてそんなことをするつていうんだい。いや、したらしたで、ギャップがあり過ぎて怖いんだけども。

「あ、それは僕の父上の話ですよ」

魔王さん、あなた、心が読めるんですね。びっくりです。

「ええ、読心術といいますか。意外と簡単ですよ。相手の細やかな機微を目で追つて行けば、なんとなくわかるモノです。あとは、一般的な思考パターンを取捨選択です」

「それが出来たら、世界は混沌の渦ですね」

「はー。だから、出来ないほうがいいですよ。僕は、生まれたときから出来ましたから」

それは残酷。

……なるほど。」うやつて、わたしがほんの数ミリ目を俯かせた
ことだけでも、わたしの心情が理解できるんだ。

「って、お父さんですか？」

「ええ、父上です。僕とは違つて、豪快な人でしたから」

うーむ、父親ということは、魔王さんはかなり容姿が似ている
んだろうかね？

似ているんだとしたら、この顔に、髭をつけたして、少しだけ精
悍な感じにすると、うん？

「いえ、似てない親子でしたから」

そういうことか。

まあ、それから、お色気ムード以外は大体の雰囲気を漂わせて、
いつの間にか夕方が来ていた。

人とのお話が楽しいと思ったのは久方ぶり。
人ではないけど、まあ、細かいことを気にしたら負けだね。

「そりいえば、あの日、なんで人間の国になんて来てたんですか？
変装もしないで」

それが疑問。

なんていうか、一瞬あのとき、馬鹿だと思った自分がいるからな
おのこと気になる。もしかして、本当は、魔王さんはアホの子なん
じゃないのかと。

「なんていうか、人間の国は楽しいですからね。いやいや、変装はしていたんですけど、酔った勢いで魔法も解いちやつて」

肩をすくめる魔王さん。
なんだ、アホの子か。

「それだけじゃなくてですね、一応、僕の敵である勇者の姿を拝もうと、勇者がその国によるのを見計らって行つたんですよ」

あ、計算高いアホの子か。

勇者さまよりかは、大分上のランク。どうせ、いまでも勇者さまは、自分の役目を忘れて、「あの娘はどこに」とかつて騒いでるんだろうな。

おかし過ぎて、笑いもでねえよ。

「で、勇者を見た」感想は?」

「なんというか、偏った善、と言いますか。偏っていない善と言いますか。僕が見た限りでは、勇者と言つより、ただの善人にしか見えませんでした」

勇者と善人は違う。

そう言いたいんだろうか。

まさしくその通りなんだけど、わたしにとっては、どちらも同じような存在。

厄介事しか周りに振りまかないという点においては、まあ、どちらも同じ。その厄介事を自分で振りまいておきながら、それを解決した後は達成感とか感じちゃってる人。周囲の人も、それに気付かず素直に喜ぶだけ。

そこで、魔王さんが指を丸めて、グーをわたしの前に出した。

「勇者、とは、なんでしょうか？」

思いつく限りでいいので、教えてください」と魔王さん。
ふむ。

わたしが考える勇者については、まあ、前述したこと
うわけじゃないんだよな。

「勇気を振り絞って立ち上がる者。勇ましさの意味を追いかける者。
臆病な自分を捨て去る勇気がある者、とか。まあ、いろいろですよ
ね」

「ふむ。やうなのですか」

民衆の間では、まあ、『強い』や『力強い』や『奮闘されて
るけど、原点に立ち返ってみればそんなところ』。

ちなみに、わたしの考えるところの英雄と勇者は違つ。

英雄は、負けてもすぐに立ち上がる者。泣いてもまた笑える者。
誰でもなれる者だ。

「セーちゃんは、物知りなのですね」

「いえいえ。それほどでも」

「僕はですね、セーちゃん。なんといつか、非戦争主義者なんですよ

「わかります」

「それで、どのよつにしたら人間との戦争を回避できるか、こつも田向ぼつこをしながら考へているのですが」

「うわー、ゆるこな。

まあ、これぐらいゆるくないと、本物の王様つてのは務まらないんだと思つけど。

わたしのお父さんは、厳格過ぎたから。国民の全てを管理しきつとして、失敗して、革命を起こされて、殺されちゃつた。だから、お父さんに、魔王さんのゆるさが少しでもあればと思えば、なんだか、胸が苦しい。

「なんとなく、思いつきましたよ。セーちゃんを見ていたら、なんだか、答えが見えてきたような気がします」

「え？ わたし、ですか？」

「ええ、貴女ですよ」

そう言つて、一ヶコリ微笑む魔王さん。

わたしに、平和へと導く要素がどこにあつたとこつんだらうつかこの人は。

小さじこりから、奴隸剣闘士の闘技を見て、きやつきやつ喜んでたような女に、何を見たとこつんだらうつか？

「大事なのは、後悔すること。ですかね、セーちゃん」

「？」

わたしが、後悔？
なんのこつちや。

たしかに、わたしの人生後悔だらけの人生だつたけど、後悔したことと言つてなにがどうなるわけでもないし。

「まあ、僕の戯言だと思つて、聞き流してください。さて、そろそろ晚餐ですから、お開きとしましょう」

「は、はい」

なんだか、魔王さんの様子がおかしいような出入り口である可愛らしげドアの方に歩いて行く魔王さんの背中を見つめながら、わたしは首を傾いでいた。

「では、セーちゃん。また」

「はい」

乾いた音を出して、ドアを閉めた魔王さん。その背中は、なんだか優げに見えた。

(、 、 、) ?

小さい頃のわたしは、深窓の少女つて感じで、本ばかり読んでいた。

その頃のわたしは、子供で、英雄譚とか冒険譚とか、無駄に脚色

された、そんなお話を大好きだった。

そこには、夢があつて、希望があつた。

そこには、物語があつて、終わりがあつた。

中でも、特に読み耽つたのは、『不幸な御姫様を勇者が助ける』お話。

不幸でもないのに、わたしはその不幸な御姫様と自分とを重ね合わせて、いつの日か、この世界から連れ出してくれるものだと信じていた。

この世界って言つても、それは全然不幸なものなんかじやなかつた。世間一般から言えれば、喉から手を出して、それで握手をするぐらいに羨ましい生活だつたと思つ。今思えば、羨ましいから。

だけど、無機質だつた。

笑つてゐるのに、なんだかそれも、誰かの気分取りみたいな気がして、気が氣じやなかつた。

だけど、物語の世界は、わたしを満たしてくれたから。

誰も傷つかない、空想物語。

思い届かず、碎け散つて行つた。

心。声。体。

だからだと、思う。

革命が起つてから、わたしの心が、声が、体が、なんとなくだけど、違う形でだけど、満たされていったのは。

元被害者。今は自由人。（後書き）

千本桜、夜に紛れ ツ！

いい曲だ。

ご感想ご批判ご指摘等々、お待ちしております。

自由人。今も自由人。

朝起きたら。

まあ、多分朝だと思つけど、ちぢぢぢぢつて鳥が騒つてゐるし、給仕の人とかが慌ただしく動いてるのがわかる。

まあ、そんなこんなで、朝起きたら。

全裸だつたつていう。

いや、そんなはずはない。昨日は、ちゃんと服を着て寝たはずだ。男を招き入れた覚えも無いし、抱かれた記憶も無い。

……なんだ、自分で脱いだだけか。脱ぎ癖、治さなきやな。

朝の少しひんやりとした空氣を全身で感じながら、欠伸をして、服に袖を通す。パリツとしていて、とても着心地がいい。

この、スタイリッシュなカジュアルな感じ。

僅かばかりの胸がシャツを押し上げているのが見えて、わたしも女なんだなって、そう実感する。あんまり実感ないけど。男だろうが女だろうが、大差ない。

次々服に袖を通していくと、なんだかそれは見覚えのあるものになつて行く。

つていうより、これ男モノの執事服じやねえか。

なんてもん女性の部屋に置いてんだ。思わず、自然に着ちまつたじゃねえか。

姿見で全身を見ると やだ、かつこいい。

「いや、自分の姿に見惚れるのはどうかと思つよ、わたし……」

いや、折角だからこのまま男装しちまいましょう。うん、それがいい。

後ろ髪を結つて、短くまとめて、耳を大きく出す。いつもより表情をキリつとさせ、軽く化粧もして うん、男装の麗人の完成だ。

白い手袋、イカスー！
ネクタイ、カツケー！

そこで、不意に、後ろからがちゃりと。
わたしが、めつた興奮してはしゃいでる所に、後ろからがちゃりと。

「せーちゃん、朝ご飯の用意が出来ましたよ」

魔王さんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんん
んっ！

やばい、恥ずかしい。なんてとこか見てくれるってそこおー！
固まるんじゃないつ！

いや、不可効力なんだよ、本当に。女の子が男の格好をしたくなるのは不可効力なのでござります。

「うん、似合つていますよ、せーちゃん。男装が似合つて、本当に美人さんでしたね」

……うん。褒め言葉が痛い。痛いよ、魔王さん。

「い、いいから、『ご飯食べに行きましょ、魔王さん』」

顔を赤くしながらやうに言つたし。

やばい、涙が出そうです。黒い瞳が、折角の黒い瞳が、涙で濁りそう。

「ええ。行きましょ。」

やうに言つと、微笑みながら手を伸ばしてくる魔王さん。

……すること、思う。

わたしは、顔を真っ赤にしたまま、つまむように、その手を取つた。

(# · ·)

莊厳なお城の、静かな庭。
わたしと、魔王さん。
木にもたれかかって、口向ぼつゝ。

「千と百、一と零。

一と零の間に広がっている世界は、わたしじゃ届かない。
千と百の間に広がっている世界は、わたしには狭すぎる。
わたしの居場所はどこなのでしょう、どこなのでしょう。
教えてください、神さま。全て知つてみるとこうのなら」

昔聞いた、とある小説の詩の一節だったような気がする。これに、曲をつけた歌が、わたしは凄く好きだった。なんだか、それを聞いていると、心がほわほわして、どこか遠くにいけるような気がしたから。

けど、詩は、自分の場所が分からないと嘆いている。だから、どこにも行けない、自家撞着。

「ああ、その詩ですか」

「え、魔王さん知ってるんですか？」

「そうですね。僕も、よく口ずさんでいましたから。まあ、僕の場合は、自己感傷に浸っている時だけですから。とくに、戦争のあとなんかは、よく聞きましたよ」

金と銀の瞳を細めて、そう微笑んでくる魔王さん。つていうか、恥ずかしいんですけども。なんだか聴かれてたっぽくて、恥ずかしいんですけど。

「あなたとわたし、だれかとあなた。

あなたとわたしの間に広がっている世界は、とても鈍く見えた。だれかとあなたの間に広がっている世界は、とても輝いて見えた。だからわたしは去りましょう、大好きです。

気付いてください、わたし。無知のふりなどやめてください」

それは、一番だったか。

とある小説の第一節の最後にある詩だったと思つ。けど、こっちの方は曲になつていないので、あんまり知られてないはずだけど。

「僕の母上が、よく口ずさんでいましたから」

「やう言えば、魔王さんの両親は？」

「ん、ああ、殺されましたよ。よくあるお話ですよ。平和活動中に人間に殺される魔族、なんていうお話は」

それすらも、にこやかに微笑みながら、言った。
そこで気付いた。

ああ、この人なりの、処世術なんだなって。
仮面、か。偽るための、面皮。だから、絶対にはがさない。はがさせない。

きっと、仮面を脱いだら、この人は 鬼になる。

本物の、魔王になる。

「最後も、口ずさんでいましたね。父上と寄りそつゝ、下脇腹を破裂させて、死にました」

「……えっと、どんなリアクションをとればいいのやら、ハテナなんですけど」

きっと、今のわたしは、この執事服の格好で朝ご飯を食べに行つた時、周りにいた人たちと同じぐらい困惑していると思つ。

「はは、笑つてくだされば、それで」

笑えるわけねえだろ。ここで笑えるほど、人間やめてねえし。

「せーちゃんは、やはり優しい人間なんですね。怒れるときに怒れる。くだらないことでも、ちゃんと怒ります。そんな人間は、あまりいません」

「いえ、わたしの場合は、ただ感情を隠してないだけですか。つて、また心を読みましたね？ セクハラです」

わたしの言葉にも、語弊があるかな。
隠していないんじゃなくて、隠せないだけ。

「せーちゃんは、だれかの心を覗きたいと思つたこと、ありますか？」

「ありますね。そりや、ありますよ」

今、あの人の気持ちが知りたいとか、どうとか、気になる。
通りすがりの人の気持でも覗けたら、さぞ面白いんだと思うけど。

「心つていうのは、複雑でしてね。あの子が好きだ、殺したい。あ笑つてる、気持ち悪いな。なんであることするんだろう、羨ましい。そんな風に、人の心つていうのは、混ざっているんです。それも、真逆の感情も」

「……それは」

確かにそうだけど。

凄いと思つたら、妬ましく感じるし。
好きだと思つたら、殺したいぐらこ愛おしくなつてくる。

「だからですね、せーちゃん。純粹なんて言葉、嘘なんですよ。濁つて無い人なんて、いません。そして濁つているからこそ、そこ

に、美を求めるんでしょう？ そこに、理想を求めるんでしょう？
人は、完成型には興味が無いから。不完全なその姿を見て、より
想像を膨らませるから、美しく感じる」

「魔王さん……けど、完成を求めるのもまた、人ですよ」

「はい。だからこそ、僕は平和の完成を目指し続けるんでしょう。
きっと、平和が完成したのなら、この世界はつまらないものになっ
てしまふんじゃないか。なんて思つて活動する革命家は、いませ
んから」

「革命、の言葉に体がぴくりと反応する。
けど、いい。

「だったら、魔王さんが目指す、平和の完成って、なんですか？」

「ぶつけてみた。

質問を。
期待を。

「そうですね。自分が今、幸せだと気付くことなく、平穏な日々
が過ぎていくような、そんな世界でしょうか。平和ってなんだろう
？ って、今自分がいる場所そのものが平和なことに気付かない。
それが究極の平和なんでしょう」

「………… そうかも、しれませんね」

返つて来たのもまた、
質問で、
期待だった。

自由人。今も自由人。（後書き）

なんだか、けつこうつな評価を得ていてる。

あらためて思ったことは、勢いって大事なんだな、と。

「感想」「批判」「指摘」お待ちしております。

自由人。今は恋するばか。

それから、数か月。

なんだかわたしは、ずっと魔王さんに面座つていた。普通に普通に。

普通が一番と称さないわたしが、なんだか普通の生活をこれでもかというほどに謳歌していたのは、まあ、驚きと言えば驚きだった。

魔王帝国は、平和そのものだった。

魔王さんの善政で、魔王さんの部下の尽力で、外界からの侵攻を感じさせないほどに、賑わい、発展していた。

ときどき、わたしが人間なのを見ると怖がる人もいたけど、最終的には、笑つて接してくれた。人間とは大違ひだ。

人間は、魔族を見るなり武器を持つて立ち上がるのが善とするのに。

自分が、そんな人間だと思つと、少し恥ずかしくなつたり。

まあ、そんな数力月。

そんな数力月後には、魔王帝国には雪が降つていた。

北に位置するためか、一年を通して肌寒い気温の魔王帝国だけど、この時期は特に寒いらしい。

わたしも、流石に執事服はやめて…………執事服、真冬ヴァージョンにしてみた。

うん。動きやすいんだ、男モノの服は。

そんなわたしの奇つ怪な格好を見て、魔王さんは、「きれいです

よ」とほめてくれる。

なんていい人だ。わたしの一生の半分の半分の半分ぐらいを捧げてもいいかもしない。

まあ、とにかく、冬で雪が降っていた。

そんな、感じだった。

(.)

戦争が、始まつたらしい。

本格的な戦争。これまでの国境付近での、小賢しい小競り合いなんかじゃなくつて、兵器と魔法と人員を大量に投入する、本気の戦争。

発端は、本当に小さなことだったのかもしれないけど。

人間に、子供を殺された魔族の親が、その人間を発狂しながら襲つたら、袋叩きに会つて、息も絶え絶えのまま麻袋に子供と一緒に入れられ、魔帝国に送り届けられた。

それで、あくまでもポーカーフェイスを氣取る魔王さんの制止を無視して、部下の数名が軍を率いて人間側の領土に侵攻。

戦争が、始まつてしまつた。

いつもどおりのわたしに宛がわれた部屋で、魔王さんと会話。

魔王さんも、こつむせびおり。处世術。「いやかに微笑み。

泣いていたんだ。

「どうにか、ならないんでしょつかね」

「どうにも、ならないんでしょつかね」

「僕が死んだら、どうにかなるかもしれません」

そんなことを、優げに微笑んで言つたり、言つてしまつたり。

わたしは、また がらにもなく、怒つてしまつ。

「やめろー。犠牲とか、代償とか、仮定とか、そんなこと死んでも言つた！ 嫌いなんだよ、そういうのー。自分が死ねばとか、自分が無能だつたからとか、そんなこと、今更言つなよー。そんなの聞いたら 」

辛いじゃないか……。

最後の言葉は、声には出せなかつたけど、わたしは、俯いたまま、魔王さんの手を握つた。

顔だけは、見せたくなかつたから。わたしは、感情を隠せないから。

「ほら、やっぱ優しいです」

俯いたわたしの、ばかなあたまを、信じられないぐらいあたたかな手で、撫でた。

それで、気付いた。

本氣だつて、こうこと。

自分が死ねば、どうにかなると、本氣でそう思つてゐ。だつて、笑つているんだもの。いつもみたいに、笑つているんだもの。どうしようもないときみたいに、笑つているんだもの。

そんな笑いは、やめてほしいのに。本当に楽しい時だけ、本当にうれしい時だけ、笑つていてほしいのに。

だけどあなたは、笑います。

「人間の奴らなんて、消えさればいいのに。腐ればいいのに。死ねばいいのに」

「誰でも、平等ですよ。せーちゃん。誰でも平等に、平等に扱われるべきなんです」

「そんなこと、不可能じゃないですか。今までの世界のどの歴史にだって、そんなことはなかつた！ 全部不平等から逃れようとして、平等を求めて戦争をしたけど！ そんなの、不平等しか生まなかつたっ！」

わたしは、顔を俯かせたまま、声を大にして叫んだ。

部屋の外に聞こえるんじゃないかと思つて、いや、絶対に聞こえている。

「へんと響いた後、しーんと、静まった。

その中でも、くすり、と、魔王さんは笑っていた。

「それでも、諦めるなんて出来ないでしょ？　みんなさんが、平等に平和を謳歌できる世界。それを諦めるなんて、僕には死んでも出来ません」

「無茶無謀無理なんてことは、魔王さんはわかつていた。
だけど、そこに選択肢として、諦めるといつ項目が最初からなかつただけのことだった。
ビームでも、革命家なんだと思ひ。

だけど、わたしだって　わたしだってっ！

「わたしは、わたしはっ！　　魔王さんに、平等に扱つてほしくなんかないっ！　あなたの唯一の不平等でいたいっ！」

恋する、女の子なんだっ！

「……ふふ。そうですか、なかなか、詩的な表現をお持ちですね、せーちゃん」

わたしの俯いたままの頭に、また手が置かれ、今度は少しだけ強く撫でられた。

……恥ずかしい。

「せーちゃん　いえ、セフィリアさん。セフィリア・アイミーシャさん」

わたしの、名前。

それを、やわらかにささやいてくれる。

忌むべき証のはずなのに、あの国の人たちに聞かれたら、絶対に殺されてしまつような名前なのに。

やさしく、ささやいてくれる。

「僕も、です。平等で平和な世界になつても、あなただけは不平等に扱いたい」

…………わたしには、頬を伝つて落ちる、あたたかな何かの名前はわからないけど、それは、嫌なものばかりじゃないってことだけは、わかつた。

ベッドのシーツに斑点模様の染みを創るわたしを見て、魔王さんは笑つた。

それが本当に楽しくて、うれしくて出た笑いなら、なら、わたしは

「……………とつても、うれしいですっ

そう言つて、下ばかり見ていた顔を、あたたかなあの人に向けて、上げてみた。

(
?
;
.
?
)

自由人。今は恋するばか。（後書き）

アコースティックギターの音色つてす”い。

頭の中で反響して、なんだか、不思議な気分になる。

”感想””批判””指摘等々、お待ちしております。

恋するほか。今は真・恋するほか。

あのあと、なんとなくだけ、甘いキスをしてみて、だけど、無粋なむふふな展開にはならなくて、それは少しだけ残念で、だけど魔王さんらしいっちゃ魔王さんらしくて、最終的総合評価は「れしかつたつていう、惚け話だつたりした。

今では、なんだか魔王さんの言葉一つ一つが「れしかし」といつ、恋愛初期状態にありがちな状態に陥ってしまったわたし。だけども、それは決して悪い気分なんかじゃなくって、逆に幸せで、がらにもなく一日中笑っていたい気分だったけど、それはわたしの意地とプライドがさせなかつた。

とにかく、翌日は、政務で忙しい魔王さんがいない自室で、枕を抱きしめながらあのときのことを思い出して、呻つていた。

わたしって、結構女の子らしいところがあつたみたいで、自分の言葉に赤面したりとかは今まであつたけど、魔王さんの言葉で赤面するとか、恥ずかし過ぎる。

「よ、よしつ。小説を書く」

自分でもわけのわからんことを語つてているとは思つけど、今の気持ちを小説にしたら、それはもう甘ラブの小説が書けると思うんだ。この世界では、既に紙は大量生産できるもの。軟木をパルプにする技術が体系统化され、その不純物を取り除くのは魔法での分離式

で行つて、製紙は蒸気機関を使って一気に。

王女の、広く浅く方式の勉強の仕方じや曖昧だつたけど、紙は結構リーズナブルなお値段で取引される。

わたしは机に向かうと、魔方式の羽ペン 魔力を込めるインクの代わりに書ける を手に取り、引き出しから紙を一枚取り出します。

あらすじは、そうだな。

一人の執事と下級貴族のお嬢様の恋愛ファンタジー、なんてどうだろうか？

よしつ、書くぞつ。

(.) メモ

しんしんと、雪が降つてゐる。なんだか、雪があたたかく見えてくる。ふんわりと、まるで綿のようにわたしの髪に降り積もる雪は、本当に柔らかくて。舌をぺろつと伸ばせば、舌先に乗つかつた雪はすぐに溶けて、ひんやりとわたしの体温を奪つていった。

う~、執事服真冬ヴァージョンでも、結構きついよ。

久しぶりに外に出てみたら、こんなに寒かつたんだね、ほんと寒い。

だけど、つん、雪つてきれいだな。純潔とかつてイメージがあるのも頷ける。

「息が白いぜ、はあーはあーっ」

執事用の白い手袋、機能性重視すぎで、まったくもつて防寒具じゃねえ。やべえ、せつかくあたたまつてきたわたしの心が、どんどん寒空に曝れていくよ。

雪をするつと滑つて地面に降り積もつて行く雪は、柔らかそうに見えて、突き刺すよつに冷たい。じつ、やめやめすつて刺さるみたいな感じがする。

後頭部は禿げてるけど、顔面はものすゞくイケメンだったときみたいに、わたしの肌にぐさつと……。

「なんでわたしが外に来たといつとね、なんとなくわい。ははっ！ 笑つてくれたまえ」

うん、寒過ぎておかしなことを言つてているけど、本当になんとかで外に出てみただけ。基本的にアクティヴなわたし。雪なんかで外に出るのを躊躇わないけど、寒い。寒過ぎる。

うーん、けど、こう、指の先から体温が退いて行く感覚つてのは、結構好きかな。なんだか、死んでるみたいだし。死んでいつてるみたいだし。

こうやって死んでいくんだ、つてわかつてたら、死ぬ時は結構落ち着いて死ねると思うし。予行練習してるみたいで、わたし、結構な努力家。

「ばかかつ。死ぬ練習してびひする」

そう言って、チークも塗つていないのでりんごのよつて紅く染ま

つた頬を、両手でぱしんと叩いた。想像以上に痛くて、少し、涙が
出た。

「それにしても、人通りが少なくなっちゃったな」

城下町のはずなんだけど、人通りが少ない。数か月前は、城から
真っ直ぐに繋がっているこの中央通り、メインストリートには溢れ
るようにならぬ人がいたものなんだけど、今はちらほらとしか見受けられ
なくなっちゃった。

魔王さんは決して強制はしなかつたけど、兵士の募集で、かなり
多くの人たちが集まつたらしく、そのことでまた悩んでいた魔王さ
んだったけど、結局、ほとんど戦場に送つてしまつたらしい。

それで、自分の店の若い衆を失つたので、このありさま。お店の
経営は細々となつてしまつた。けど、魔王さんが昔から出して
いた備蓄令かなんかのおかげで、どの家庭にもそれなりの備蓄があつて、
生活にはあまり困つていならしい。

本題の戦争では、拮抗状態にあるらしい。
けど、その拮抗状態が一番消耗が激しい。攻めにも受けにも回れ
ないその苛立ちは、だんだんと両陣営を蝕むだらうからつて、魔王
さんは焦つていた。

そんな、あれこれ。

そんな、あれこれの中、わたしは小説を書いていて、今はそのク
ライマックスあたりで、今は氣分転換。なんとなくの、外出。

そんな、何の期待も無い氣分転換だったけど
きゅつきゅつと踏みしめられる音がした。

後ろの雪が、

「セーちゃん、こんなところでは、風邪をひかれますよ？」

「魔王さん、風邪をひこちゃいますよ」

「ふふ、なら、一緒に帰りましょうか」

そう言って、わたしの手をあたたかなその手で握ってくれる。ほんとうに、あたたかつた。

「魔王さん、ありがとうございます」

「セーちゃん、ありがとうございます」

わたしと魔王さん。

二人で互いをあたため合いながら、冷たい雪の中、一緒に帰った。

……帰る場所があるのって、すぐしあわせなんだって、このとき、初めて気付いた。

恋するばか。今は真・恋ゆめばか。（後書き）

声を震わせじて呟んだ……。

つて、本編のことについて触れると、あまらぶになつてしまやがつた
つ！

ご感想ご批判ご指摘等々、お待ちしております。

うん、あと少し。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8329y/>

奴隸王女の「死ねばいいのに」は結構辛い。

2011年11月27日13時50分発行